

外来化学療法室では、医師、看護師、薬剤師、看護助手など様々なスタッフが患者さんの治療にあっています。今回は、治療に関連するアルコールについてご紹介します。

☆治療にかかわるアルコールについて☆



治療に使用する抗がん剤の中には、アルコールに対する注意が必要なものがあります。

乳がんや胃がん、肺がん、婦人科がんなどに使用されるタキソール®(パクリタキセル)とタキソテール®(ドセタキセル)です。これらのお薬は、水に溶けにくいいため、アルコールで溶解して使用しています。

パクリタキセル治療を1週間ごとに行った場合は、1回の治療あたりアルコール相当量はビール約250mLに、3週間ごとに行う治療の場合は、1回の治療あたりアルコール相当量はビール約500mLに相当します。

(過敏症予防に抗ヒスタミン剤も投与されるため、治療中～後、眠気を催すこともあります。)

また、ドセタキセルのアルコール量は、パクリタキセルよりは少なく、3週間ごとに行う治療の場合でビール約50ml(コップ半分)のアルコール相当量になります。



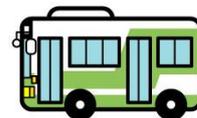
お酒に弱い方、飲めない方は、前もって主治医や看護師、薬剤師など医療スタッフにお声かけ下さい。

また、これらのお薬を外来通院治療した後、車を運転すると飲酒運転したのと同様になります。治療を受けられるときは、ご自身での運転はお避けください。

個人差はありますが、体重60kgの人がアルコール5%のビール500mlのアルコールを処理する時間は4時間程度必要とされています。



公共交通機関で病院へ



☆採血や注射する前に使用する消毒用アルコール綿について☆

採血や注射をする前に、注射部位を消毒します。その消毒で今までに

- ・皮膚が赤くなったり、かゆくなったりしたことはありますか？
- ・アルコールを飲んで顔が真っ赤になることがありますか？

上記の症状を体験したことのある方は、アルコールによる過敏症が考えられます。

また、アレルギー体質の方もおなじような反応が出ます。

採血や注射をする前に「アルコールの過敏症があります。」または「アレルギー体質です。」などと看護師や医療従事者に申し出てください。アルコールを含まない消毒へ変更しますので、お気軽にお声かけ下さい。

